

平家物語

木曾の最期

①木曾左馬頭、その日の装束には、赤地の錦の直垂に唐綾緘の鎧着て、  
として堂々と見えるような腰に挿し打つたる甲の緒締め、いかものづくりの大太刀はき、  
打ち付けているを

② 石打ちの矢の、その日のいくさに射て少々残つたるを、  
合戦 残つ ている の

特に頭上高く突き出るようにして  
形動 頭高に 負ひなし、  
左

③滋籬の弓持つて、聞こゆる木曾の鬼葦毛といふ馬の、きはめて  
評判の高い いうでとりわけ 太う  
一持つ

たくましいに、黄覆輪の鞍置いてぞ  
乗つたりける。  
イ音便

木曾義仲は、  
ふんばり立ち上がり、大音声をあげて名のりけるは、  
たことには

⑤ 「昔は聞きけんものを、木曾の冠者、今は見るらん、」  
以前は聞いたであろうが、御前達はここで見ているだろう。

⑥左馬頭兼伊予守、朝日の將軍源義仲ぞ  
やぞ。

⑦甲斐の一一条次郎とこそ聞け。⑧互ひによいかたきぞ

⑨ 義仲討つて兵衛佐に見せよ  
討つ 談朝 見せろ  
や。」とて、をめい 大声を上げ  
て 駆く。馬に乗つて走り回る

⑩ 一条次郎、「ただ今名のるは大将軍ぞ。」

取り逃す  
ます  
討ち残す  
よ  
言つ

⑫大勢の中に取りこめて、我討つ取らんとぞ進みける。  
義仲を  
取り囲んで  
討ち取ろう  
が  
進んだそだ。

⑬木曾三百余騎、六千余騎が中を、縦様・横様・蜘蛛手・十文字に

が  
一條の

駆け割つて、後ろへつつと出でたれば、  
一條軍の  
木曾軍は  
駆け割つて、後ろへつつと出でたれば、  
木曾軍が  
五十騎ばかりになりにけり。  
木曾軍が  
五十騎ばかりになりにけり。  
木曾軍が  
五十騎ばかりになりにけり。

木曾軍が  
五十騎ばかりになりにけり。

土肥次郎実平の二千余騎  
そこを破つて行くほどに、土肥次郎実平二千余騎でささへたり。  
が  
防ぎ止めている

⑭それをも  
破つて行くほどに、あそこでは四、五百騎、ここでは

二、三百騎、百四、五十騎、百騎ばかりが中を、駆け割り駆け割り  
駆け抜け駆け抜け

行くほどに、主従五騎にぞなりにけり。  
行くほどに、主従五騎にぞなりにけり。

⑯五騎がうちまで巴は討たれざりけり。

⑰木曾殿、「おのれはどうどう、女なれば、いづちへも行け。  
木曾殿は  
おまえ早く早くであるのでどこでも行け。  
副詞

⑮私は討ち死にせんと思ふなり。  
は  
おまえ早く早くであるのでどこでも行け。

⑯もし人手にかかるば自害をせんずれば、  
敵の手かかつたらばするつもりなので  
連れていらっしゃつたたなかつたどし  
ふさわしくないおつしやつたたけれども

いきに、女を具せられたりけりなんど言はれんことも、  
しかるべからず。」とのたまひけれども、  
ふさわしくないおつしやつたたけれども

木曾殿の最後の

(20) 巴はなほも落ちて逃げ落ちて、行かざりになかつたたけれるが、あまりに言はれたてまつりて、  
申し言わせたてまつりて、  
謙讓 作者→義仲

申し  
たてまつりて、  
謙譲 作者→義仲

「あつぱれ、よからうかたきがな。」  
ああ  
相手にするの  
良い ような 敵  
がほしいな

馬を止めて待機している  
たるところに、武蔵の国に聞こえ 知られ  
たる大力、 て いる の

御田八郎師重、三十騎ばかりで出で來  
たり。  
出で來 たり。 | た

は  
無理に並んで、むんざと組み付いて、必ずと取つて  
御田師重に

引き落とし、わが乗つたる鞍の前輪に押しつけて、  
自分 乗つ  
ている  
御田師重を

巴、その中へ駆け入り、御田八郎に押し並べて、むすと取つて  
引き落とし、わが乗つたる鞍の前輪に押しつけて、  
少しも動かさず、首をねぢ切つて捨ててしまつた。  
ちつともはたらかさず、首をねぢ切つて捨ててしまつた。

その後、物具脱ぎ捨てて、東国の方へ落ちぞ行く。  
逃げて

手塚太郎討ち死にす。手塚別当落ちにけり。  
は  
した  
は  
逃げ延び  
てしまつた